

「J u s t i t i a」

学生の行うべきこと——と聞けば誰も「学業」と答えるだろう。
実際その通りで、それさえこなしていれば「学生」を全うする事は簡単だ。しかし学校生活を送る上で何故だか必要とされるものがある。
それ——キャラづくりはあたりが良ければ周りから好かれるし、悪ければ当然待遇も悪くなる。しかしそうなるとは限らない場合もある。

「きり一つ、れーい、着席」

「今日は特になにもないけど提出物出せてない奴ー？あと三日で点切られるぞ。あと、最近校舎の周りを不審者がうろついているらしいから下校時は気を付けるように。」

「きり一つ、れーい、着席」

朝礼が終わりざわつき始める教室。

「誰だよ提出物出せてない奴」

「俺だぁ！」

途端、待ってましたとばかりに声を張り上げたが無視をされる。

「おーい、シカですかぁ？放置プレイですかぁ？それはそれでそそりますけどね、ハイ。」
はぁ、とため息をついたようなクラス一同。…別に嫌っているのではない。むしろこういう立ち位置でおさまっているのだから仕方のないことだとも言える。かといってそれが最初の頃からだった訳ではない。

～数ヶ月前～

「ウエエエエエエイイイイイ！」

その頃の彼は今のようにどこか暖かい目ですら見られずただ冷淡に扱われていた。

「おいそこどけよ、ヤク中さんよ」

「む？俺は断じてそんなもの摂ってないぞ？」

「じゃあただのイカレボンチだ。いいからどけよ」

突き飛ばされて尻餅をつく。その様子を見ても誰も手を貸そうとはしない。イジメられているというよりは関わり合いたくないと思われていた。

「もちっと手加減をしてくれたらと一ても嬉しいんだk どなあ」

彼が起き上がりまえを見るとなぜかさっきかれをおしのけた奴の背中があった。その向こう…扉のところには大きな人影があった。

一同「え？」

大男「最近話題沸騰中の不審者です。よろしくおねがいします。」

一同「あ、はい。そうですか。」

大男「死ね餓鬼どもオオ！」

一同「きゃあああああああ！？」

大男×ショットガン(バレル切り詰め)=暴漢 の公式になぞらえたかのような不審者が現れ、教室はパニックとなる。と、いまにもブツ放しそうな狂人の前にこのクラスにおいての狂人である彼がしゃしゃり出てくる。

一同「何してんだ手前ェ！？余計な刺激与えんじゃねェ！」

彼「俺はみんなを救う！早く逃げたまえ！」

一同「いや、何恰好つけてんの？お前が盾になんてなれる訳ねーだろ」

大男「とりあえず、ご退場願おうか」

彼「え？いや、これはギャグの一環でして…」

大男「馬鹿か、コイツ…ふん、面白いじゃねえか。おいクソガキ」

彼「なんでしょう御代官さま？」

大男「ひとつ、俺とゲームをしようや」

いきなりの男の誘いに皆、は？となる。

彼「げ、ゲーム？」

大男「ああそうだ。ここにコインがある」

彼「あーなるほど、つまり表がでたら俺が勝利で…」

大男「なんだ、表を選ぶのか。なら俺は裏だな。そして裏がでたときは俺が勝利だ」

彼「勝ったら見逃してくれる？」

大男「ああ約束しよう」

そして弾かれるコイン。クラスの面々は固唾を飲んで見守る。

チャリーン

上を向いていたのは裏だった。

大男「これで」俺の勝ちだな」

しかし、彼の顔に先程から浮かんでいる笑みは凍りつくどころか、深みを増している。

彼「ああ、“俺の”勝ちだ」

大男「どういう…」

彼「俺は一人称を俺にしていた！お前もなあ！」

大男「それがどうした？」

彼「だから、勝っても敗けても両方俺ってこと」

なんたる暴論、しかし言ってることは解らんでもない。あまりに理不尽なその言い分に膝をつく大男。

その後は特に何もなく、突入してきた教職員の手によって捕り物があったただけだった。

それからクラス一同は馬鹿の有用性に気付き、待遇を(多少は)改めたのだった。

～舞台裏～

『そうなんですよ…いまいちクラスに溶け込めてない生徒がいまして…はい、ああそれはいいですね…ええ…では求人広告を…はい、それでは…』

『どうやら上手くいったようです…はい、仰った通りに暴漢は教職員が捕えたあと、謝礼というよりは給料を払っておきました…はい、これで彼もクラスに受け入れてもらえるでしょう…え？何故たかが担任が一人の生徒にそこまでののか、ですか。そうですね…あんなキャラの奴なんてそうそういませんからね。もったいなかったんですよ…では』

世の中の秩序は裏方の人間の正義感により保たれているのかもしれない――